1950年代日本の社会的文化的状況と生活記録運動

—生活記録運動の系譜に関する考察（2)—

辻　智子

はじめに

日本において生活記録という言葉は遅くとも1920年代から使用されていた。それは，とりたてて特殊専門的な言葉として考えられてはいなかったが，いくつかの文脈において，ある意図や目的を達成するための方法として採用されてきた歴史も有している。その文脈とは例えば，①戦前の学校教師たちによるもの，②プロレタリア文学運動・労働運動のなかで，③戦時下の大日本青年団による生活記録報道運動，④戦後の生活改善・新生活運動，などである[1)]。これに対し生活記録運動という言葉は，1950年代に初めて登場したと見られる。鶴見和子は，「生活記録とは，おとなが，自分の感じたこと考えたことを，ほかの人びとに伝えるために，その感じや考えの発生のきっかけとなった事物を，借りものでない自分自身の生活のコトバで，具体的に書いた文章」[2)]と定義したが，このような意味での生活記録が1950年代日本各地の「自発的に形成された小集団」のなかで「持続的に」取り組まれるようになり，そのいわば草の根の民衆運動の広がりがやがて生活記録運動と呼ばれるようになったとされている。

では，なぜ1950年代に生活記録運動が登場したのだろうか。この点について従来の説明は例えば次のようなものである。「生活記録運動が一九五一（昭和二六）年，日本がサンフランシスコ条約で，形だけの『独立』をした年から起こってきたということは，終戦直後の『民主化』のお祭さわぎが挫折し，逆もどりの傾向があらわれたとき，おとなたちは，ほんとうに自由で独立した人間になるために出なおしを考えていた」[3)]。しかし，国家や社会の動向と具体的な実践とは必ずしもストレートに直結するものとは限らない。生活記録運動と歴史的状況とのあいだをつなぐもの，あるいはその接続の仕方のありようを明らかにする必要がある。

さらにこのことは1950年代末の生活記録運動の「衰退」言説の再検討ともかかわっている。1950年代後半からのその「停滞」の理由として，「高度成長政策にともなう国民生活の変化やそれを批判的にとらえる視点の未成熟」などが指摘されてきたが[4)]，実際の実践とそうした社会の変化とは具体的にどのようにかかわっていたのだろうか。さらに先述の鶴見の定義を採用するならば実態としての生活記録の実践は1960年代以後「衰退」したわけではなく，多様な形態を含み込みながら一般化してゆき，とりたててそれを生活記録運動と呼ぶことなく，時には新たな名称が付されながら，むしろ各所で展開されていくようになったと言うべきではないだろうか。なぜなら人びとが自分たちの実感と経験に根ざしてものを書きあう実践は，以後様々なところで多様な形で広く展開されていったからである[5)]。このことは，ある事象を生活記録運動と命名し言説化する行為をこそ対象化し、その検討および生活記録運動と日本の1950年代という社会的文化的状況との関連性への着目の必要性を示唆している。

以上のような問題意識から本稿は，生活記録運動の系譜を1950年代日本の社会的文化的状況とのかかわりから検討する。具体的には，まず生活記録運動という言葉が登場し広がってゆく経緯を整理し（第一節），次に生活記録運動と，①労働組合，②戦争・平和，③文化的状況（具体的には音楽・本・映画）とのかかわりについて述べる（第二，三，四節）。「労働組合」「戦争・平和」「文化的状況」という三つの切り口は，生活記録運動の具体的事例「生活を記録する会」の検討を通して浮かび上がってきたものである[6]。

第一節　生活記録運動の登場

生活記録運動という言葉は，管見の限り1954（昭和29）年に日本青年団協議会（以下，日青協）が用いたのが最初である。その後，日青協役員らが日本生活記録研究会を発足させ1955（昭和30）年2月には機関紙『生活記録運動』を創刊した。日青協は共同学習の具体的方法として生活記録に期待し，青年たちの現実生活の改善と青年集団の学習活動の進展という方向性を明確に持つ学習運動として生活記録運動を「日本国中のすべての青年」に広げようと推進していった。

他方，日青協が生活記録運動という言葉を打ち出す以前から各地の市町村・地区・集落レベルの青年集団のなかでは，自分たちの書いた文章を文集にして，それについて話しあうといった活動は自主的・自発的に行われていた。そこでは「生活記録」「記録活動」「作文」「生活綴方」「生活学習」「らくがき帳」など様々な名称が用いられており，生活記録運動という共通認識はなかった。また，ものを書くことを生業としない人びとが自分の体験や生活を具体的・写実的な文章で書くという行為，およびそれを誰かと共有するといういとなみは，地域青年集団も含め1950年前後より目立ち始めてきていた。例えば，各新聞読者投稿欄（後に生活記録欄も登場）が生まれ活況を呈し「投稿ブーム」と言われた。手記集・生活記録集・体験記・作文集・投稿集と銘打った単行本が多数刊行され[7]，ものを書きあい読みあう人びとの小集団・サークルが各地で誕生し，「十人寄れば文集が出た時代」と言われた。労働組合機関誌から文化団体・社会運動団体の機関紙・雑誌・新聞まで含めればなおさらその数は確定し難いが，1954（昭和29）年末までに創刊された地域ローカル新聞は全国で371紙とも言われている[8]。また，『葦』『人生手帖』などいわゆる「人生雑誌」と呼ばれる雑誌の読者・投稿者の会や，「山脈の会」などものを書きあうことを目的とする人びとのグループも各地に生まれ，雑誌『人民文学』『文学の友』『生活と文学』[9]や，「思想の科学研究会」による雑誌『芽』および『中央公論』誌上の「日本の地下水」などがそうしたサークル・サークル誌を盛んに紹介した。地域青年団・青年学級・婦人会・若妻会・母親学級やそこから生まれたサークルなど主に農山村地域の地縁を基盤とする集団においても話しあい書きあう集団的活動や文集づくりが行われ，山形県・岩手県などでは生活記録運動の全県的なネットワークも生まれた。長野県でも下伊那郡の村々では多数の婦人文集がつくられ，村を超えた横のつながりも模索された。学校で生活綴方教育の試みが広汎に意欲的に展開された時期であり，教師たちは自らの授業実践を実践記録として記述しそれを読みあって活発な意見交換を行うとともに，保護者との共同作業やPTA活動の一環として文集づくりに取り組み，地域青年集団のメンバーの一人（あるいは相談役）として地域の生活記録運動と強いかかわりを持った。また工業地帯・都市部では，労働組合の文化活動や職場を基盤とするサークルにおいて，話しあいや機関紙・文集の発行が行われた。炭鉱労組・銀行労組・繊維労組などは労組の運動方針として組織的に取り組み，小グループで話しあい書くという活動を熱心に進めていったところも見られた。

このような状況に対し，1954（昭和29）年

9月，『別冊・文学の友』（「日本の記録」特集号）は，「どうしてこのように生活記録，人生記録を書くということが，はげしい勢で全国に広がっているのだろうか」と投げかけた。また1956（昭和31）年，サークル運動についての以下の文章において生活記録運動は，「たくさんの地域的な――しばしば職業や階層も一致している人々の――サークル運動の主体はここにある」と紹介されている。

> 平野のなかの農村や都市の裏町や大工業の作業場はいうまでもなく，大洋に面する漁村や山かげの炭坑部落から学校・病院・裁判所・国鉄・商店のなかでも，あすの生活へのアスピレーションに励まされた若い人々の集団的活動が，ひそやかながら澎湃と高まっている。北海道から沖縄にいたるまで日本全国のいたるところに，あらゆる職業の中で，まつたく新しい性格の文化活動，生活現実のなかから生まれた運動が，明るい炎のように燃えひろまっている。そしてここ二，三年，にわかに勢いを増し，誰ももうその力を無視することができない（傍点原文ママ，佐々木斐夫「サークル運動の歴史的な意味」『中央公論』1956年6月）

生活記録運動という言葉は，このような状況全般を指し示す言葉として，当初の日青協による青年学習運動としての意味を超えて登場したものと考えられる。国分一太郎は，「おとなが生活綴方作品を書く運動」が「『生活記録』を書く運動」すなわち「生活記録運動」と呼ばれていると『生活綴方ノートⅡ』（新評論社，1955年5月刊行，70頁）に書いたが，これが日青協文書以外において登場する生活記録運動の初出と見られる。これを受けて鶴見和子も同年8月，「生活記録運動は，戦前からある子どもの生活つづり方教育の歴史をふまえて，戦後にでてきた，おとなの生活つづり方運動」と述べ[10]，それらは1951（昭和26）年以後，「ものすごいいきおいでさかんになりはじめた」ものであったとした[11]。そしてそこには，指導者やリーダーを中心としながら意識的・意図的に進められてきたものと，見通しや計画性はなく体あたりしながらとにかくやってきてふり返ってみると生活記録運動だったというようなものとがあると言い，生活記録運動とは，生活綴方という一定の枠組みを設定しつつも，その表現スタイルや形式は厳密なものではなく，むしろ「自由で独立した人間になるための」いとなみ，「自己を含む集団のもんだい」を話しあい書きあい行動しあう大人の「自己改造」の実践として理念的に把握された[12]。それゆえ具体的には，様々なところで様々に書きあう人びとの実践の展開の集積を，言い換えれば人びとが書いて表現するといういとなみの総体とその勢いを，生活記録運動という言葉でとらえ表現したのである。

このように見てくると，言葉としての生活記録運動とは，多様な事実に対し，それらを名指す言葉として後づけで登場したものであると言える。興味深いのは，生活記録運動の当事者が必ずしも自らの行いを生活記録運動と自覚しているとは限らないことである。さらに言えば，生活記録運動という言葉が，その実際の担い手たちにとってよりもむしろそれを論じる側にとって大きな意味を持つ言葉として受けとめられていたことである。

例えば，1950年代当時，「生活記録とは何か」「生活記録は文学か」「生活記録と生活綴方はどのように異なるのか」などがしばしば問われ議論されたが，これらの問いは学者・作家・評論家（あるいはそれらになりたいと思う人）にとって切実な問いであり，生活記録運動の実践現場の人びとは，その名称や表現形式の区別などに格別の関心は払っていなかった。生活記録運動という言葉で表現される以前からその事実は存在し，そこにおいて「生活綴方」「綴方」「生活記録」という言葉は混在していた。生活記録運動に関する議論は，事実をどのように受けと

めたらいいのかという学者や作家・評論家たちの，ある種の戸惑いを示すものであり，当時「知識人」と呼ばれたこれらの人びとにとってより重要な意味を持ったと言える。「民衆」「大衆」が，誰に指示されたわけでもないのに自ら表現活動を始めたこと，そこでの表現が時に小説家の書く小説よりも読み手を惹きつけ社会に受け入れられ広がったこと，そこには「職業知識人」に任せてはおけないといった心情や自分たち自身で書くことによって訴えたいというメッセージが存在していたことは[13]，書くことを生業とする人たちに大きな衝撃であった。この衝撃を素直に表明した「知識人」の一人が鶴見和子であり，鶴見は，生活綴方（生活記録）を教師も含めた大人たちの思想形成において重要な意味をもつものと受けとめ，大人自身も取り組む価値あるものであることを主張して自らも東京で「生活をつづる会」を始めた[14]。このようにものを書くことを生業とする人たちにとっての衝撃の大きさが，生活記録運動という言葉を生んだ背景には存在していたと言える。

第二節　生活記録運動と社会的文化的状況①―労働組合活動と戦後の「新しい」日本

では次に生活記録運動とそれを生起させた社会的文化的状況について，主に「生活を記録する会」（東亜紡織株式会社泊工場[15]、以下泊工場）の事例に即して検討してゆく。

まず，生活記録運動が生起した直接的な契機として労働組合活動があった。当時の労組活動は，なぜ，どのように，生活記録運動と親和的であったのだろうか。

泊工場の場合，生活記録運動は初め労働組合文化部が組織した文化サークル活動のなかで取り組まれた。音楽（コーラス）・演劇・映画・文学の4サークルのうち直接的には文学サークルによる発案であった。当時のサークルは一つの活動に特化した機能的な集団というより，横断的にどの活動にも参加するような様式のもので，そこでの目的は明確に「仲間づくり」にあった。実際，それらは当時の労働者たちにとって「先進的な」娯楽＝文化であり，「新しい」「近代的」「民主的」なものをもたらす触媒であった。その「先進性」とは，「新しい」「近代的」「民主的」な青年・労働者の連帯的な行動によって，「古い」「封建的な」日本社会を変えていくという構図であり，そこには青年・労働者たちの強い主体意識があった。

こうした「先進性」への共感や賛同の広がりは，第二次世界大戦後の政治や社会体制の「新しさ」「正義」への流れであるが，具体的に見ると，泊工場の場合，主に次のような経験によって裏づけられるものであった。それは一つに労働組合や自治会などの日常的な活動，二つに戦争に対する危機感と平和への希求，三つに先駆的モデルとしての「新中国」への憧憬である。本節では，労働組合や自治会など日常的な活動を詳しく見てみることとしよう（他は次節以降で触れる）。

例えば，泊工場の女性メンバーたちは，いかに当時の労組活動がおもしろく魅力的であったかを口々に語る。登内常子（1950年入社）は，「戦争も放棄したし，平和憲法でやってくって」いう，「民主的な方向へ」の気運があふれていた時代だったから，労働組合活動は「うんと魅力があって」おもしろかったと言う。定時制高校進学を希望しながら就職した田中美智子（1951年入社）は，「こっちの方がおもしろそう」と進学をやめて労組活動・文化サークルへと入っていった。彼女たちは，新制中学を卒業後，農村を離れ都市部の大規模繊維工場に集団就職して来た10代後半の「セーラー服にオカッパ頭の少女たち」だった[16]。彼女たちは戦後の中学校で「新しい」教育を受けて育ち[17]，なかには「意気燃えて」いた若い中学校教師が語る「平等」「民主主義」といった言葉を「そうなんだ，そうなんだ」と大きな「感動」をもって受けとめ，「貧乏人でも，女でも，勉強していいのだ，ものを言っていいのだと思った」と語る人もいた[18]。現実には皆が平等に高校

へ進学できるわけはなく経済的理由から中卒後就職という道を選択した彼女たちであったが，しかしその選択は「働きながら勉強ができる」からという理由を多くが挙げており，彼女たちが強い向学心を持っていたこと，それを根拠づけるものとして新制中学校での教育経験があったこと，そしてそこには「新しい」時代への希望が存在していたことを見てとることができる。そして，勉強したいという女性たちの期待を受けとめたのが当時の労働組合だったのである。

1946（昭和21）年に結成された泊工場の労働組合は，どちらかというと労使協調路線の穏健な組合であったが，上部団体の全繊同盟（全国繊維産業労働組合同盟）が総評（日本労働組合総評議会）に加盟し[19]，いわゆる「逆コース」とそれへの反発が顕著になり平和運動が盛り上がりを見せてくる1950年頃より活発化し手当金支給や賃上げをめぐってストライキや会社との交渉を展開した。繊維労働者にとってとりわけ重要な意味を持ったのが，1954（昭和29）年の近江絹糸紡績のいわゆる「人権争議」である。泊工場の労働者たちも近江絹糸津工場へ争議の応援に駆けつけた。これらの経験は，連帯や団結による直接的行動によって現実を変革しうることを単なる机上の理想論としてではなく，目の前に展開される具体的事実の裏づけをもって彼ら彼女らに確信させた。また，こうした経験と連動して日常的な労組活動や寮（寄宿舎）自治会活動も展開された。意欲的な女性たちは，選挙を通じて労組の役員や職場代議員となり，婦人部・文化部などの労組専門部員として活動した。男子寮・女子寮それぞれで自治会が組織され，寮生活上の諸問題への対処や寮生どうしの懇親・交流の企画などを自治会役員が取り仕切った。

とりわけ生活記録運動とのかかわりから興味深い泊工場の出来事がある。1952（昭和27）年，工員の大量採用によって「ギュウづめ」になった女子寮では寮生活と会社への不満が噴出していた。労組が会社と交渉した結果，最終的には会社が新寮建設を決断し一件落着したが，そこにおいて問題解決の牽引の役割を担ったのが生活記録であった。寮での生活の現実やトラブルの実態が寮生によって具体的に文章に書かれ，それが労組機関紙を通して共有化され，不満・問題化への支持や共感が広がっていった。そして，この一連の経過を通して，生活記録が，状況の問題化とその解決において実践的な意味を持つことが明確に自覚化された。

このような経緯もあり，生活記録を書きあうサークル活動は，「本当の」「カンネン的でない」労働組合活動をするためだと考えられた。それは，眼前の具体的現実をどのように認識すべきか，どのように問題化し解決の方向を見出してゆくべきかを，労働者の権利や労働組合の理念に照らしつつ，自らの実感と具体的経験に即して検討し，現実をよりよい方向へ変革してゆくことを意味する[20]。実際，労組・自治会の活動に問題意識を持ち，それに参加するメンバーと，生活記録運動の担い手とは重なっていた。

第三節　生活記録運動と社会的文化的状況②—戦争・平和

泊工場の生活記録文集を通読すると，とりわけその初期において，戦争や平和，社会情勢や世界の動向への高い関心を読み取ることができる[21]。

この頃の主な社会的出来事を列記してみるならば，国鉄労働者大量解雇・下山事件・三鷹事件（1949年），「レッドパージ」などGHQの占領政策の反共路線への転換，「朝鮮動乱」（朝鮮戦争）勃発・警察予備隊令施行（1950年）があり，戦後の民主化推進の政府の動向に対し「逆コース」と言われた。1952（昭和27）年には，破防法（破壊活動防止法）反対の大規模ストライキが展開され，第一波・第二派ストには約100万人が参加，職場大会や抗議集会などの行動も含めると約340万人が参加[22]，さらに6月の第三派ストまでの5回を通じた参加人員延

べ総数は約270万人であったと言われる[23]。原水爆禁止・平和運動にはそれまで公的な場での発言や社会的な行動には縁のなかった女性たちも大勢参加し，内灘闘争など基地問題への取り組みや，基地から子どもを守る会，母と女教師の会，PTA，母親運動などが展開された。このような動向を身近に感じながら泊工場の人びとは，その個人の日記に選挙結果や政府・政党の動向を書きとめ，政府の憲法改正案は自衛隊を認め徴兵制度を復活させようとしているのではないかといった意見や，松川事件や第五福竜丸事件への憂慮の見解などを記載している[24]。七夕飾りの願いごとには「平和」の文字が躍り，メーデーの手づくりプラカードには「労働強化反対」と並んで「原水爆禁止」「平和憲法」が掲げられた[25]。「歌い，おどり，職場の事を語り，恋愛を語り，再軍備反対をとなえ，平和を願った」と言われたように[26]，歌や踊りなどのレクリエーションも，職場や労働組合活動も，恋愛も，戦争・軍隊・平和も，それらすべてが同列の関心事かつ相互に関連するものとして位置づけられていた。

戦争や平和の問題に対する強い関心の理由を個々人の生い立ちに探れば，「大東亜戦争」の体験・記憶と戦後の困窮を指摘することができる。最初の文集『私の家』（1952年6月）には，父や兄の招集や戦死，「満州」からの引揚げ，疎開，空襲など縁者からの見聞も含めた戦争体験が，戦後の「私の家」の経済的困窮の要因として綴られている。この時，書き手たちは16～18歳であり，第二次世界大戦下で子ども時代を送った人たちである。そこにおける基本的認識は，「大東亜戦争」を否定し，それを批判する立場であり，二度と戦争というものを起こしてはならないという強い決意であり[27]，また戦争への対抗として平和への思い入れの強さと自らが平和運動の担い手になるという意志である。

そこにおいて興味深いのは，平和を国どうしの関係や戦争や軍備への反対としてとらえるだけでなく，日常的な生活のなかで意見や考えの異なる人と徹底的に話しあい，その話しあいによって懸案事項や問題を解決し，当事者間が折り合いをつけ，何らかの着地点を見いだすということを平和ととらえる，とらえ方である。そのような意味での平和を積極的に試みることもまた平和の実践であり平和運動でもあると考えられていた。例えば，泊工場労組機関紙『自由な広場』第9号（1953年8月25日）は，「八・九月を平和月間に」という見出しとともに，当時の世の中の情勢について，朝鮮半島では「平和が戦争に勝った」こと，しかし朝鮮戦争が「終わって」も私たちの周囲は平和一色ではないこと，日本の再軍備を進める動きがあり戦争への不安があること，原爆について「戦争を早く終結せしめた効果がある」と言われていること，日本各地には700ほどの軍事基地があり多額の国防費が費やされていること，そしてアメリカの植民地同様の状態から抜け出して日本は「民族の独立と自由」を確立しなければならないこと，などを指摘した上で，「平和のための作品募集（綴方，詩，日記，写真など）」を次のように呼びかけた。

> 真の平和は自分達の生活が不安なものでなくなり皆が人間らしい平等な自由な生きがいのある社会になることだと思う。
>
> 私達は今，平和について考えたり語ったりして平和を押しすすめようとする時，ただ“戦争反対”“平和を守れ”などと叫んでいるだけでは何も平和のために働いている事になりません。自分たちの生活が良くなることが直接平和ということになる以上，先ず毎日の身近な問題から平和に近づけなければ駄目だと思います。
>
> 自分達は労働者なんですから生活綴方的に毎日の作業の中から見たまま聞いたまま思ったままに書いてみることにより，何が平和につながり何が戦争へつながっているかがわかってくると思います。（中略）

世界の動きが私達一人々々の生活につながっている時，毎日の労働の中から見た事，聞いた事，感じた事を，ありのままに書く事によりその中から出て来た問題を考え，解決してゆくことが平和を作り出してゆく具体的な活動の一つだと思います[28]。

ここには，平和という言葉を媒介として，日常生活と世界とを直接的に結びつけてとらえる感覚が明確に存在していた。ゆえに，話しあうことや話しあいを通して集団的に問題解決をはかってゆくことが平和への実践だと認識され，職場・労働組合・寮自治会は，そうした実践の場であると考えられた。そこにおいて生活記録を書くということは，「何が平和につながり何が戦争へつながっているかがわかって」ゆくためであり，しかも，自分が見聞きしたまま思ったままの「毎日の作業」を書くことが，「何が平和につながり何が戦争へつながっているかがわかって」ゆくことに直結しているとも考えられていた。

このように泊工場の生活記録運動には，戦争や平和への強い問題意識が存在し，またそれは世界や社会情勢への関心のみならず，その実践としての自らの日常的な生活や活動（労組・自治会・サークル）も地続きのものであるという認識があったことがわかる。

第四節　生活記録運動と社会的文化的状況③—音楽・本・映画

ところで，泊工場の人たちが戦争や平和といった事柄を考えるにあたり自分や身近な周囲の体験談以外に根拠・情報源としたものは，新聞・雑誌などの日々の報道に加えて当時の多数の出版刊行物や映画であった。当時，彼ら彼女らは実に多くの本を読み，映画を観ていた。

図表1に，1952（昭和27）年と1953（昭和28）年の読書の動向をまとめた[29]。田中美智子（1951年入社）の日記には，1952（昭和27）年には23冊，1953（昭和28）年には30冊の本の読書記録・感想コメントが記されているなど[30]，まずその読書量の多さに目を惹かれる。その内容について全般的な傾向を見るならば，文学，生活綴方集・学校教育実践記録，平和・戦争に関連するもの，中国・ソビエトなど共産主義国について書かれたもの，教養書や女性論，サークルや学習活動の手引きとなるようなものなどであり，労組機関紙『自由な広場』での本の紹介や推薦文などを見ると労働者や子どもたちなど庶民による記録が好まれていることもわかる。戦争体験やそこで生きぬいていく女性たちの姿が描かれているもの，生活綴方文集，貧困や権力に立ち向かっていくものなどへの賛意・共感・支持が多く表明されている。

なかでも彼ら彼女らの思想形成に影響を与えたものとして，中国・ソビエトなど共産主義国について書かれたものが着目される。とりわけ生活記録文集や日記から1950年代前半の新中国の影響の大きさを見逃すことはできない。例えば，『週刊朝日』臨時増刊号（1953年4月22日）の中国特集を三宅昭夫と二人で興味深く読んだ田中美智子は，新中国の青年の理想は職場結婚であり，結婚しても女性は職を離れずに働くこと，また女性が結婚後に家庭に入ることは封建的だと青年たちが言っていることを日記に書き写し[31]，次のようにその感想を記していた。

やはり政治が新しくなると日本では理想としか考えられない事が一般の人たちにどんどん実現されているのだ。うらやましくなった。日本はいつこんな時がくるのだろうと思うと心細くなってくる。古川さんがよく云う言葉，「女はどうせ結婚するまでだから」も正しくない事がわかっていて云っているのだと思うけど，それを聞く度に暗い気持になる。日本学界で権位（ママ）のある知識人が口をそろえて中国をほめるのを聞いていると革命ももうすぐだと錯覚を起こしそうになる。

田中は，日本の状況にため息をつきながらも新中国こそ理想と考え，それに向かって自分たちは努力しなければならないと考えた。「日本を少しでも中国に近づけるようにするために，考える人間をつくるように努力して」いこう[32]，「[映画『村八分』の感想のなかで―引用者補促] 地位が上になればなるほど権力に弱いのだ（略）早く中国の様にならなければ」[33]と日記に書いた。田中が，新中国を理想と考えたのは，労働者が国づくりの中心となり，労働者の生活のために諸制度がつくりかえられるとともに，労働者自身が積極的に自らの意見を主張し職場や生活を変えていっているという姿に対してであった。なかでもとりわけ田中が感心したのは，新中国における若者たちの恋愛や結婚，そして結婚後の生活についてだった。田中は新中国におけるそれらを理想的と言い，恋人や夫婦が相手を呼びあう「我的愛人」という中国語を，たびたび日記に記している。また，中国文学は「女の問題」を考える好材料であるとして，趙樹理の小説『結婚登記』『家寶』『李家荘の変遷』などをガリ版に切って印刷・配布し，文学サークルの読書会のテキストにもした。これらは封建的な婚姻制度や風俗習慣を廃し，新しい男女関係や恋愛・結婚へと変わってゆく中国の変化をとらえた小説である。田中の他にも，澤井余志郎はマルクスやレーニンよりは毛沢東に多くを学んだと言い，魯迅を愛読し，生活記録文集に魯迅の小説の一文を引用したり本を紹介したりした。毛沢東の『実践論』『矛盾論』を読んだ他のメンバーもおり，新中国への関心は概して高かったのである。

次に映画について見てみよう。1950年代は映画の「黄金時代」と言われるように，当時，それはもっとも人気のある娯楽だった[34]。泊工場の労働者たちも実に頻繁に映画を観ている。労組映画サークルは，四日市映画サークル協議会に加盟し，それによってメンバーは市内映画館で映画を料金格安で観ることができたため[35]，休日や終業後，工場から四日市市街に外出し映画館に足を運び数々の映画を観た。どのような映画を見ていたか，労組機関紙が「よい映画」として紹介したもの，およびメンバーらの日記から実際に鑑賞された映画を拾いあげてみたのが図表2である。内容は様々であるが，労組機関紙上や鑑賞者どうしでの批評では，恋愛至上主義的なものやブルジョア的なものに対する批判と，反戦・平和のメッセージや貧困・労働者を扱ったものへの共感・好意が示されている。

その他の日常的な娯楽・楽しみに音楽があったが，ここでのそれは主に歌，それも主に『青年歌集』に掲載されている，いわゆる「うたごえ」運動の歌であった。仲間が集ると必ず歌った，闘いにも活動にも常に歌があったという。当時，彼ら彼女らが常に携帯し「私たちのバイブル」と呼ぶ『青年歌集』に収録された曲目は図表3の通りである。そこには日本を含む世界の民謡とともに，「うたごえ」運動のなかで生み出されてきた新しい歌があり，それを泊工場の人びとも好んで歌った。それらのなかには自分たち「働く若者」こそが，連帯して社会を変え，「新しい」社会をつくってゆくのだというメッセージが一貫して込められていた。

しあわせの歌
一，しあわせは俺らのねがい
　仕事はとっても苦しいが
　流れる汗に未来をこめて
　明るい社会をつくること
　みんなとうたおう
　しあわせの歌を
　ひびくこだまを追って行こう
二，しあわせは私のねがい
　あまい思いや夢でなく
　いまの今をより美しく
　つらぬき通して生きること
　みんなとうたおう
　しあわせの歌を
　ひびくこだまを追って行こう
三，しあわせはみんなのねがい

あさやけの山河を守り
働くものの平和の心を
世界の人に示すこと
みんなとうたおう
しあわせの歌を
ひびくこだまを追って行こう[36]

当時,「うたごえ」運動を広めるために全国各地を回り，多くの青年労働者たちに慕われ，泊工場でも人気のあった人物に，ぬやま・ひろしがいた。ぬやまは，戦前からの活動家であり獄中で敗戦を迎えた日本共産党員であるが，共産党員ではないものも含め若者たちにとってはカリスマ的存在だったとされる。彼の書いた文章「自由な人間」[37]のなかには,「笑いたいときに笑える若者になること。泣きたいときに泣ける若者になること。怒りたいときに怒れる若者になること。考えていることを，そのまま口に出して他人にいえる若者になること」とある。自分の意志で行動し，それに責任をもつことに怖れるなと，ぬやまは若者たちに語りかけた。そして，民主主義国家とは，そうした独立した人格を持つ人間が集まって相談し，自分たちにとって都合のよい社会秩序を作り出した国家のことであり，日本が本当に民主主義国家となるには，自由かつ独立した人間になることが必要なのだと説いた。このきわめてストレートなメッセージは，当時の青年・労働者たちの心をとらえた。泊工場のメンバーたちは，このような，ぬやまのメッセージを受けとり，ぬやまの詩集を読み，文集に掲載して共有し，その詩を口ずさんだのであった。

働くことの尊さ，労働者（＝肉体労働者，プロレタリア）であることの価値，労働者どうしの連帯・仲間の結びつきの大切さ，明るい理想の未来へ向かって行動する勇敢さ，これらを「スクラム組んで歌う」ことで，当時の彼ら彼女らは身体的にも精神的にもその連帯感・解放感を高めていった。また，そのような自分たちこそが，時代の先駆であるという自負心もあった。もちろん，歌うだけでなく，歌にあるメッセージを，日常的な生活やサークル活動・労組活動において実践し現実化しようとする行動と努力とに裏づけられたものとしての「新しさ」や進歩性であり，そのような方向性で一人ひとりが自分を「確かなものとする」ための，いわば手段が生活記録運動だと考えられた。

おわりに

以上1950年代の生活記録運動とは，当時の社会的文化的状況との密接な関連のなかで展開されたものであったことを具体的・実証的に裏づけてきた。本稿では，その積極的な側面，分かりやすい点の例示にのみ終始したが，当然のことながら状況の変化とともにその関連性の様相も変わる。1950年代後半の展開も見すえた生活記録運動の展開とその歴史性に関する考察は，また別の機会に行いたい。

注

1) 拙稿「戦前における繊維『女工』と書くこと・生活記録」（日本社会教育学会編『日本社会教育学会紀要』No.42，2006年），同「生活記録運動の系譜に関する考察―戦前における学校教師とのかかわりを中心に―」（『神奈川大学心理・教育研究論集』第26号，2007年），大串隆吉「『生活記録運動―戦前と戦後』覚え書」（東京都立大学人文学部『人文学報』1981年3月），同「生活記録運動の歴史的研究―プロレタリア文学運動から生活記録運動へ―」（東京都立大学人文学部『人文学報』1984年3月），笹川孝一「生活記録報道運動」（『現代教育学事典』労働旬報社，1988年），さがわみちお「生活記録運動の系譜とその今日の問題点」（『月刊社会教育』1959年9月），今井正敏「青年団の生活記録運動のあゆみ」（日本生活記録研究会編『青年と生活記録』百合出版，1956年），無着成恭「生活記録の目的と方法について（生活記録運動の問題点）」『作文と教育』1956年7月），羽仁説子「生活記録について」（『生活の科学』要書房，1953年，『羽仁節子の本 婦人と生き方Ⅲ』草土文化，1980年所収），その他日本青年団協議会の諸資料より。この点に関する先行研究として中内敏夫は，生活

記録を，「生活綴方のうち，初等の学校教育という特殊の教育環境から離れた青年やおとなを指導対象と書き手とするもの」と定義し，「生活記録ということばも，その指導体系の原型もすでに1920年代に生活綴方に先立って成立していた」と述べ，その実践例として高知県土佐郡行川村青年会における小砂丘忠義の文集づくりを挙げた（中内「解説　小砂丘忠義『土を踏みて』第二号・応募文概評」同編『日本教育論集第1巻　ナショナリズムと教育』国土社，1969年，同「生活記録」民間教育史研究会・大田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』評論社，1975年）。

2）日本作文の会編『生活綴方事典』，明治図書，1958年，440頁。

3）牧瀬菊枝「生活記録運動の歴史」，日本作文の会編，前掲書，1958年，441頁。

4）笹川孝一「生活記録運動」『現代教育学事典』労働旬報社，1988年，467頁。

5）1960年代以降も継続された生活記録運動として，岩手県の農村女性の文集『働く母　生活の記録』（1973年より『おんな　働く母の記録』と改題，岩手県立図書館所蔵，三上信夫『女の苦闘史　もう一つの昭和』彩流社，1990年），広島県の文集『みちづれ』・『みちづれニュース』（松岡克昌氏所蔵，同『道づれを求めて』関西図書出版，1990年），「山脈の会」（同会編『私たちの昭和史　《山脈の会》記録文集』思想の科学社，1989年）など。公民館等の社会教育活動において生活記録を書きあうことや文集づくり，話し合いの記録づくりなども定着し継承されていった。その例として，妻有の婦人教育を考える集団編『豪雪と過疎と　新潟県十日町周辺の主婦の生活記録』（未来社，1976年），国立市公民館市民大学セミナー編『主婦とおんな』（未来社，1972年），松下拡『健康問題と住民の組織活動』（勁草書房，1981年）他。また地域青年団の青年問題研究集会はレポートを書いて持ちよりそれをもとに集団で話しあうというスタイルを現在まで一貫してとっている。さらに視野を，サークル・グループ活動，住民運動・市民運動にまで広げれば，そこでなされる様々な記録活動やミニコミ誌・通信発行などがあり，1960年代後半以降，部落解放運動のなかで芽ばえ展開されていく識字運動なども指摘できる。

6）東亜紡織株式会社泊工場（三重県四日市市）の労働組合文化活動のなかから生まれた生活記録運動で，その記録が単行本『母の歴史』（木下順二・鶴見和子編，河出書房，1954年），『仲間のなかの恋愛』（磯野誠一・木下順二・鶴見和子・日高六郎・丸岡秀子編，河出書房，1956年）として刊行され生活記録運動の事例として当時広く知られた。また1950年代から現在に至るまでの記録が資料集『紡績女子工員生活記録集（全12巻）』（日本図書センター，2002/2008年）として復刻刊行されている（生活を記録する会編，解説・辻智子）。

7）例えば1950年代初頭のものとして，『沖縄の悲劇　姫百合の塔をめぐる人々の手記』（仲宗根政善，華頂書房，1951年），『雲ながるる果てに―戦没飛行予備学生の手記―』（白鴎遺族会編，日本出版協同株式会社，1952年），『雨の日も風の日も　働く少年少女のうったえ』（法政大学出版局編・発行，1952年），『主婦の作文』（吉川晋編，六興社，1952年），『原爆に生きて』（原爆被害者の手記編纂委員会編，三一書房，1953年）など。これに先立って1940年代末に，『はるかなる山河に　東大戦没学生の手記』（東大戦没学生手記編集委員会編，東大協同組合出版部，1947年），『きけわだつみのこえ―日本戦没学生の手記―』（日本戦没学生記念会監修，東大協同組合出版部，1949年）が，また小学生の作文集として『原爆の子』（長田新編，岩波書店，1951年），『山びこ学校』（無着成恭編，青銅社，1951年）などが刊行され広く社会的反響を呼び起こしている。

8）丸山尚『ミニコミ戦後史　ジャーナリズムの原点をもとめて』三一書房，1985年，24頁，27頁。

9）『人民文学』（第1巻1号1950年11月～第4巻11・12号1953年12月），改題『文学の友』（第5巻1号1954年1月～第6巻1号1955年1月），後継雑誌『生活と文学』（第1巻1号1955年11月～）は，人びと＝「大衆」自身による表現と文化の創造を積極的に促すことを試みた。1950年末から1951年頃，『人民文学』は読者に向けてしきりに身近な場所でのサークル＝「仲間の会」の結成を呼びかけている。それに応えてか，読者からもサークルやサークル誌の紹介が寄せられ，またサークルどうしの横のつながりを強めるような誌面づくりが提案されたりしている。そしてこの頃，実際に文学サークルは「全国にグングンふえて」きていたという。この後，編集者の呼びかけに応え，読者は自分たちの

サークル誌やサークル誌や作品を送り，誌面にはそれらからの作品（「生活記録」など）が多数掲載されるようになり，巻末には全国のサークルやサークル誌を紹介する頁が設けられた。鳥羽耕己は，『人民文学』は全国サークル誌のネットワークとしての役割を果たしていたと意味づけている（「サークル誌ネットワークの可能性―『人民文学』と『新日本文学』から見る戦後ガリ版文化―」『昭和文学研究』第52集，2006年3月）。

10) 鶴見和子「生活記録運動の展望――自然発生的なものと意識的なものとの結びつきについて――」『文学』8月号，1955年。後に鶴見も，「子どもの生活綴方と区別して，いつのころからか，おとなの場合は『生活記録』とよぶようになりました」と述べている（「生活記録運動の意味――経験の発生の場へ」『新日本文学』no.457，1985年10月）。

11) 鶴見がそこで挙げた例は次の通り。『機械の中の青春――紡績女工の詩』，『明日のある娘ら――繊維労働者の生活綴方』『銀行員の詩集』，『エンピツをにぎる主婦』，『野の草のように――母の地図』，『女は考える』，『女の眼と心』，『生きる』，集団創作放送劇「紡績の四季」など。

12) 鶴見和子「生活綴方教育にまなぶ」『図書』1952年10月号（参照・引用は，鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社，1963年）。

13) 「生活者である主婦や働く娘が，自分たちの生活のことを書き始める動機は，今の小説も映画も論文も演説も，職業知識人にまかせておくかぎり，自分たちのものではない，という，正しい認識――というよりも，それは，そのことにハラが立つ，という感じとして意識されている――から出発して，だから，自分たちは，自分たちの感じや考えを，自分たち自身で，書くことによって，うったえたい，という意欲となってあらわれる」（鶴見和子「婦人」『岩波講座文学第二巻　日本の社会と文学』岩波書店，1953年）。

14) 「生活記録」と「生活綴方」について，それを異なるものとする見方と，ほぼ同じものとする（書き手の異同においてのみ区別）見方とがあるが，ここでは実態分析を主とすることから特に区別せずに用いる。

15) 東亜紡織株式会社は，中央毛織紡績株式会社（1922年設立）を前身とし，1941年，錦華毛糸株式会社を合併して設立された。戦後は泉州（大阪）の小工場（従業員約1,000人）から出発して四日市（三重）の楠工場・泊工場，大垣（岐阜）工場と拡大し，1953年に総従業員数が6,000人超となり創業以来最多となった。泊工場は，戦時中の陸軍製絨支廠が1946年2月1日付けで東亜紡織に払い下げられた工場で1949年に大垣工場のメリヤス編機が移設されメリヤス編を含む紡毛の総合工場となった。工程は，選別・洗毛・染色・紡績（カード，ミュール，検査）・機織・整理（洗絨，補修）・縮絨・乾燥など。従業員数は1953年末に1,404人（うち女性が1,072）で最多（東亜紡織株式会社社史編纂室『東亜紡織70年史』東亜紡織株式会社，1993年）。

16) 男性メンバーの澤井余志郎は次のように語っている。「新制中学卒業の娘さんたちが集団就職で工場に入ってきて，おおぜい働くようになって，工場の雰囲気がガラッと変ってきた。それまでの女工さんは，世間の蔑視と，きびしい労働，男性管理者の締めつけの中で，荒々しい言葉つきや，すさんだ身振りをする女性も多く居て暗い雰囲気もあったが，戦後の新しい教育を受けた娘たちの入社は，暗い抑圧を過去のものとする清新な力を持ち込んだのである」（高麗恵「沢井余志郎さんに聞いたこと①　戦後の実像」『季刊　象』1988年10月）。なお1950年代の繊維労働者の意識については，『日本労働運動史序説―紡績労働者の人間関係と社会意識―』（三輪泰史，校倉書房，2009年）も参照。

17) その「新しさ」とは，社会・英語・家庭科などの新教科，野外教室・野球・バレーボールなどのスポーツ，フォークダンスやクラブ活動などであり，児童・生徒たちによる創造活動や自治活動の具体的な経験であった。なお、これらは筆者によるインタビューの証言。

18) 鈴木久子（1949年入社＝集団就職第一期生）。

19) 総評は，労働者の雇用・生活の問題とともに日本の講和問題や憲法・平和にかかわる課題への取り組みを積極的に取りあげ，内部に意見対立を抱え込みつつも「再軍備反対」「中立堅持」「軍事基地提供反対」「全面講和」のいわゆる「平和四原則（再軍備反対と講和三原則）」を掲げ勢いを強めていった。

20) 1950年代半ばより泊工場では生活記録運動が会社や労組幹部からの批判にさらされ，生活記録運動をやめるような働きかけがなされてゆくが，それは生活記録運動がこのような方向性を有するものであったことを裏づけている。

21）1952年10月（推定）に編まれた文集には，原爆や核兵器，朝鮮戦争，サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約の締結，警察予備隊・保安隊の創設などに対する危機感を前提としており，現在の自分および家族の生活困窮の原因としての戦争というだけでなく，現在進行形で展開される社会情勢と重ねあわせる形での記載が見られる。

22）労闘（労働法規改悪反対闘争委員会）の発表による（日本労働組合総評議会編『総評十年史』労働旬報社，1964年，321-322頁）。

23）山田敬男「総評の結成と左転換―戦後民主主義の担い手への道―」（広川・山田編『戦後社会運動史論―1950年代を中心に―』大月書店，2006年所収）。

24）NHK調査は，1949（昭和24）～1955（昭和30）年にかけて「世界戦争の起こる危険性がある」が「ない」を上回り，1950年代前半，日本において戦争への不安を強く持つ人びとが多かったことを伝えている（NHK放送世論調査所編『図説　戦後世論史』NHKブックス，1975年，引用は，前掲山田2006年。

25）田中美智子・三宅昭夫日記に記載されているエピソードより（1954年4月29日，6月23日，7月6日，7月20日，9月23日）。

26）文集『なかまたち』11号，1955年12月，14頁

27）泊工場では米軍や保安隊に提供するための毛布を生産していたことから，戦争反対という主張と，自分たちの労働が朝鮮戦争を支えているという事実への戸惑いもあった。なお当時の労働運動・社会運動のなかには，自分たち労働者がつくる製品が戦争のために提供され，またそれによって自分たちの生活が経済的に支えられるという関係（「特需景気」）に対する批判的な意見が存在し，また実際に労働者による工場サボタージュなどの取り組みもあった（『戦後日本スタディーズ①……40・50年代』岩崎・上野・北田・小森・成田編，紀伊國屋書店，2009年）。

28）労組機関紙『自由な広場』第9号（1953年8月25日）

29）実際にメンバーたちが読んでいた本，および労組文庫に配架されたり労組機関紙で紹介されたりした本のタイトルであり，読まれていた本の一部にすぎない。田中美智子は，日記に読んだ本について克明に記録し，その感想や批評を書いていた。澤井余志郎の「読書ノート」には，本の内容が要約されている。

30）ただし1953年分は三宅昭夫の読んだものも含む。またこれらに加えて雑誌なども読んでいた。

31）田中美智子日記1953年4月4日

32）田中美智子日記1953年3月10日

33）田中美智子日記1953年4月10日

34）1950年代は日本における映画の全盛期とされ，映画館と入場者数は増大する一方で，「全国的な強力な配給網を持つ大手の会社にとっては作品をつくりさえすれば儲かる黄金時代」であった（佐藤忠男『増補版　日本映画史2』岩波書店，2006年）。

35）四日市映画サークル協議会は，1953年に発足（推定）。「四日市映画サークル協議会会則」によれば，それは三泗労協文化部に所属する組織であり，「映画を通じて会員の知性の向上を計り映画の質的向上に協力し日本の民主的文化を守り育てることを目的とする（第二条）」とある。会費は2ヶ月60円で，①映画割引（映画館によって異なるが10～20円の割引。低料金のため割引なしという映画館もあった），②無料鑑賞会（2ヶ月に1度），③機関誌発行（毎月の上映スケジュール，映画紹介，会員による映画批評などを掲載した『映画しんぶん』），を行った（四日市映画サークル協議会『映画しんぶん』No.29，1955年10月4日）。

36）文集『なかまたち―なかまのなかの結婚式―』1956年7月29日

37）『ぬやまひろし選集7　働く若者よ誇り高くⅡ』（引用は，長島又男『ぬやま・ひろしとその時代』社会評論社，1985年，164-167頁）。

図表1 「生活を記録する会」メンバーの読書歴（1952～1953年）

①生活綴方・生活綴方教育・作文教育関連

『魂あいふれて　二十四人の教師の記録』（百合出版，1951年）
『山びこ学校』（無着成恭編，青銅社，1951年）
『大関松三郎詩集　山芋』（さがわみちお編，百合出版，1951年）
『新しい綴方教室』（国分一太郎，日本評論社，1951年）
『生活する教室　北方の教師の記録』（鈴木道太，東洋書館，1951年）
『帰らぬ教え子　教師の反省記録』（今井誉次郎，東洋書館，1951年）
『みつばちの子　青森県黒石小学校四年生の生活記録』（鈴木喜代春，東洋書館，1952年）
『恵那の子ども　岐阜県恵那郡小学児童のつづり方集』（恵那綴方の会編，百合出版，1952年）
『教育詩集』（周郷博編，牧書店，1952年）
『私たちの綴方会議　子どもの生活表現について』（未来社編集部編，未来社，1952年）
『村の少年期』（国分一太郎，青銅社，1952年）
『土は明るい』（宍戸秀男，東洋書館，1952年）
『教師としての出発』（今井誉次郎，明治図書，1952年）
『お父さんを生かしたい』（さがわみちお，青銅社，1952年）
『主婦の作文』（吉川晋，六興社，1952年）
『雨の日も風の日も』（法政大学出版局編・発行，1952年）
『綴方の伝統　小砂丘忠義15周忌記念論稿集』（日本作文の会・代表今井誉次郎，小砂丘夢編，百合出版，1953年）
『作文教育新論』（波多野完治・滑川道夫，牧書店，1953年）
『私たちの生活教室　生活環境と作文教育』（巽聖歌編，未来社，1953年）
『書くこと　国語と文学の教室』（さがわみちお，第3版1956年，福村書店）

②戦争・平和運動関係

『きけわだつみのこえ―日本戦没学生の手記―』（東京大学協同組合出版部，1949年）
『生き残った青年たちの記録』（東大唯物論研究会・学生書房編集部編，1949年）
『原子雲の下に生きて　長崎の子供らの手記』（永井隆編著，講談社，1949年）
『原爆の子』（長田新編，岩波書店，1951年）
『われらかく育てり　戦災児童の手記』（積惟勝編，新興出版社，1951年）
『われら母なれば　平和を祈る母たちの手記』（平塚らいてふ・櫛田フキ共監修，青銅社，1951年）
『真空地帯』（野間宏，河出書房，1952年））

③中国関連

『医師バソーン』（周而復／島田政雄訳，青銅社，1951年）
『実践論』（毛沢東／社会科学研究会編訳，三一書房，1951年）
『李家荘の変遷』（趙樹理，ハト書房，1951年）
『中国は世界をゆるがす』（ジャック・ベルデン／安藤次郎等訳，筑摩書房，1952年）
『はたらくものの国　新中国をつくる原動力』（西園寺公一，山田長吉，白水実，井関けい子，本橋渥／理論社編集部編，理論社，1953年8月）
『結婚登記』（趙樹理／小野忍訳，岩波新書，1953年）
『新しい中国　帰国者の体験から』（在華同胞帰国協会編，朝日新聞社，1953年）
『学習の理論と実際　中国の経験にまなぶ』（尾崎庄太郎，ハト書房，1953年10月）
『丁玲作品集　新中国文学選集』（丁玲，青木書店，1953年）
『中国　ヨーロッパを追い越すもの』（南博，光文社，1953年）

④その他

『母』（ゴーリキー）
『土』（長塚節）
『はたらく歴史』（徳永直，新興出版社，1948年）
『グループ・ガイダンス』（前田偉男，原書房，1949年）
『いかに生くべきなのか　若き世代の手記と日記』（緑の会編，文理書院，1951年）
『ニッポンの女　女の夜あけのために』（タカクラ・テル，理論社，1951年）
『ニッポン日記』（マーク・ゲイン／井本威夫訳，筑摩書房，1951年）
『タカクラ・テル著作集27　新文学入門』（タカクラ・テル，理論社，1951年）
『歴史と民族の発見』（石母田正，東京大学出版会，1952年）
『僕らはごめんだ　東西ドイツの青年からの手紙』（篠原正英編，光文社，1952年）
『南からの風』（エリマル・グリン／岡田よし子訳，世界文化社，1952年）
『スターリン氏の招待』（松山繁・中尾和夫，光文社，1952年）
『一つの真実に生きて』（丸岡秀子，東洋書館，1952年）
『真実に生きる道』（柳田謙十郎，文理書院，1952年）
『新しい愛情の記録　在中国の妻と在日本の夫との往復書簡』（山原けさの・山原宇顕，青銅社，1952年）
『静かなる山々』（徳永直，蒼樹社，1952年）
『ことごとくの声あげて歌え　アメリカ黒人詩集』（ラングストン・ヒューズ編／木島始訳，未来社，1952年）
『愛情の記録　若い友への手紙』（清水慶子，弘文堂）
『恋愛と結婚』（古谷綱武，三笠書房，1952年）
『思想と人生　いかに考えるべきか』（岡邦雄，文理書院，1952年）
『永遠の少年　健康と幸福への道―働く少年少女に贈る幸福の鍵』（桜沢如一，法政大学出版局，1952年）
『目撃者の証言』（高見順，青銅社，1952年）
『タカクラ・テル名作選　百姓のうた・狼』（タカクラ・テル，理論社，1953年）
『真実は壁を通して　松川事件被告の手記』（松川文集編纂委員会編，青木書店，1953年）
『たゆまぬ努力　ささやかな自信』（山本茂実編，葦会，1953年）
『武装せる市街（日本プロレタリア文学体系）』（黒島伝治，青木書店，1953年）
『社会科学基礎講座　第4巻』（宮川実・柳田謙十郎共編，青木書店，1953年）
『ヤロビの谷間：下伊那のミチューリン運動』（栗原農夫，青木文庫，1953年）
『病めるアメリカ』（石垣綾子，東洋経済新報社，1953年）
『アンネの日記』（アンネ・フランク／皆藤幸蔵，文芸春秋新社）
『歴史教育論（著作集第6巻）　所収：平和と愛国の歴史教育』（高橋，あゆみ出版）
『現代詩手帖』（小野十三郎，創元社，1953年）
『アヴィニョンの恋人』（E．トリオレ／川俣晃自訳，岩波書店，1953年）
『風俗の歴史 第2ルネサンスの恋愛と結婚』（フックス／安田徳太郎訳，光文社，1953年）
『機械のなかの青春―紡績女工の詩―』（呉羽紡績労働組合，三一書房，1953年）
『女子労働者』（嶋津千利世，岩波新書，1953年）
『母の歴史』（木下順二・鶴見和子編，河出新書，1953年）

（作成　辻智子）

図表2 「生活を記録する会」メンバーの鑑賞映画歴

〈1952年7月～12月〉
にがい米
山びこ学校
母なれば女なれば
ヨーロッパの何処かで
美女と盗賊
天国と地獄
原爆の子
生きる
陽のあたる場所
殺人狂時代
明日は日曜日
原爆の図
おかあさん
〈1953年1月～12月〉
真空地帯
肉体の悪魔
ひめゆりの塔
夫婦
お茶漬けの味
女ひとり大地を行く
ミラノの奇跡
第三の男
黒騎士
現代人
安月給の唯一の慰みは焼酎のむ時
花嫁の父
別離
煙突の見える場所
ベルリン陥落
征服者
雨月物語
村八分
怒れ三平
縮図
蛇と鳩
地上最大のショウ
もぐら横丁
麦めし学園
女という城
愛情について
ライムライト
河
サムソンとデリラ
生きるためのもの
ホフマン物語
アチャコの青春手帳
大菩薩峠
戦艦大和
美女カンラメ
コグマとミツバチ
雲ながるる果てに
令嬢ジュリー
美女と闘牛士
坊ちゃん
蟹工船
風と共に去りぬ
花の生涯
ひろしま
日本の悲劇

〈1954年1月～12月〉
シェーン
唐人お吉
日の末て
禁じられた遊び
あにいもうと
グレンミラー物語
女の園
放浪記
私は告白する
ローマの休日
七人の侍
大阪の宿
落ちた偶像
第十七捕虜収容所
山河はるかなり
億万長者と結婚する方法
にごりえ
女の暦
悪人と美女
悲劇のエリザベス
若草物語
愛情の瞬間
重盛君上京す
母の秘密
真紅の女
モガンボ
足摺岬
ともしび
晩菊
美男天狗党
波止場
セールスマンの死
ドンカミロ
愛は第一話
どぶ
アンリエットの巴里祭
女性を永遠に
愛と死の谷間
泥だらけの青春
二十四の瞳
潮騒
何処へ
鶏はふたたびなく
青い麦

（作成　辻智子）

図表3 『青年歌集』収録曲名一覧

※『青年歌集』（関鑑子編著，音楽センター発行）第一篇～第四篇の目次から作成（辻）。
※ジャンル分けは『青年歌集』による。

日本曲（ジャンル分けなし，民謡，労働歌，平和の歌含む）
- 美しき祖国のために
- 若者よ
- 我らの仲間
- 原爆を許すまじ
- 世界の青春
- 東京―北京
- どじょっこふなっこ
- さくら
- 防人の歌
- 夕張娘
- 花
- 芝浦
- 嵐よ吹け
- 流亡の曲
- どっこい生きてる
- 平和の声
- 仲間達
- 親友の歌
- 心の歌
- 早春賦
- ふるさと
- 春のうた
- 夏は来ぬ
- 赤トンボ
- 山小屋の灯
- 朝
- 捨吉の歌
- 一度でよい
- これが二人の恋さ
- 母なる故郷
- 立てよ若人
- 俺達の国
- 冬から春へ
- 祖国の山河に
- 平和を守れ
- もずが枯れ木で
- 手まり歌
- 川
- ゆりかご
- 虫の声
- 小馬
- だるま
- かっこう
- 祖国
- 愛する街
- 皆んな友達
- 母の願い
- 主婦のうたごえ
- 工場の中から
- 京浜労働者
- 国鉄労働組合歌
- 全電通組合歌
- 平和こそ我らのもの
- 誓い
- 元気な子供
- 俺は百姓
- あの子
- 甦える広島
- 守れ妙義
- いぬふぐり
- 水爆犠牲者を忘れるな
- きみ囚われて
- 俺達は旗
- ぼくらの歌
- 力を合わせりゃ鉄路もゆれる
- 俺は労働者
- よるひるガチャンコ
- 紡績女工はもう泣かないよ
- 晴れた五月
- 世界をつなげ花の輪に
- 町から村から工場から
- 同志よ固く結べ
- 同志は倒れぬ
- 南葛労働者の歌
- 民族独立行動隊の歌
- 青年よ団結せよ
- 全世界民主青年歌
- ラ・マルセーズ
- インターナショナル
- 武器と自由の歌
- くるめくわだち
- 我等は歌う
- 平和音頭
- たたかいの中に
- 民族解放の歌
- 赤旗
- 開けゆく歴史
- 憎しみのるつぼ
- 若者よ
- 心の歌
- 国際学生連盟の歌
- うたごえよ明日のために
- 使命
- 祖国の若者
- 青年行動隊の歌
- アジア平和行進曲
- 大島節
- 大漁節
- ずいずいずっころばし
- 常磐炭坑節
- 三池炭坑節
- お猪の子唄
- お江戸日本橋
- 木曾節
- そーらん節
- 会津磐梯山
- 八木節
- 秩父音頭
- 江戸子守唄
- 佐渡おけさ
- 秋田音頭
- 最上川の舟唄
- 相馬盆唄
- 五木の子守歌
- 椎葉の稗つき歌
- 谷茶前の浜
- 田植唄
- 内灘かぞえ歌
- 内灘そーらん節
- 圧延音頭
- 炭坑ばやし
- よさこい
- 遠島甚句
- 伊那節
- 長野平和音頭
- 内灘追分
- もちつきおどり
- 子守唄
- 月の輪音頭
- 平和くどき
- 木びき唄
- 沖の鷗に
- 箱根八里
- 珍鋳物音頭

アメリカ曲
- おおスザンナ
- 草競馬
- スワニー河
- もういやだ
- 金髪のジェニー
- オールドブラックジョー
- ネリーブリー
- 懐かしのヴァージニア
- アロハオエ
- 武器はみんなすてろ
- 牧師と奴隷
- ドリーデー
- 夢見る人
- 谷間の灯
- ラ・パロマ
- 誰も知らぬ私の悲しみ
- 深き河
- さあ連てけ
- 権兵衛と田吾作
- いとしのアリスは眠る
- 希望のささやき

イギリス曲
- 麦畑
- アンニーローリー
- ロンドンデリーエア
- 久しき昔
- 峠の我が家
- 故郷の廃家
- 埴生の宿
- 青春の歌
- スコットランドの釣鐘草
- 懐かしき愛の歌

ドイツ曲
- 故郷を離るる歌
- 山こそ我が家
- 村祭り
- 自由の歌
- 歌もたのし
- 美わしき春
- 野ばら
- ダンカングレイ
- 猟人の合唱
- おどりうた
- 村のかじや
- 故郷
- オ・ブレネリ
- ホフマンの舟唄
- 楽し歌声
- 三匹の蜂
- かっこうワルツ
- ローレライ
- 歌の翼に
- 私はドクトル
- 円舞曲
- 帰省
- 学生歌
- 小さなラッパ吹き
- めざめよ若人

ボヘミヤ，チェコスロバキア曲
- 家路
- 霜の
- 合唱のよろこび
- 歌いましょう
- おお牧場はみどり

イタリー曲
- サンタルチア
- さらばナポリ
- 遥かなるサンタルチア
- かえれソレントへ
- フニクリフニクラ
- 山の人気者
- おおソーレミオ
- ラ・スパニョラ
- 村の娘
- カプリ島
- 乾杯の歌
- 人民よ進め
- チリビリビン
- マリア・マリ
- 嘆きのセレナーデ
- ニーナの死
- 麦打ちの唄

スペイン曲
- 蝶々
- ジュアニタ
- アイアイアイ

オランダ曲
- 五月だよ

フィンランド曲
- いちご

フランス曲
- ひかるみどり
- ノルマンティーユ
- 別れの曲
- マドロスの歌
- おどり
- 橋の上で

デンマーク曲
- 村の婚礼

スウェーデン曲
- 空しく老いぬ

ハンガリー曲
- 汝が友
- 私達のブカレストにて

ポーランド曲
- ワルシャワの労働歌
- たてよ祖国の子ら

朝鮮曲
- 解放歌
- 南朝鮮の兄弟を忘れるな
- 農民歌
- 人民抗争歌
- 建設
- 輝く朝鮮
- トラジ
- アリラン
- 人民遊撃隊の歌
- 畠へ行こう
- 民主の春
- 種まきに行きましょう
- 春の声
- 麦打ちの唄
- 泉のそばで

中国曲
- 義勇軍行進曲
- 保衛黄河
- けつまづいてもころんでも
- 百姓はたのし
- 喜児の歌
- 全世界人民の心は一つ
- 労働者は強い
- たたえよ祖国
- 草原情歌
- 糸つむぎ
- 勝利のヤンコ
- 戦車兵とトラクター手
- 花あそび

ブラジル曲
- 大地はほほえむ

インドネシア曲
- 自由ヴェトナム行進曲
- インドネシア独立の歌
- 労働者と農民の団結の歌

ロシア，ソヴィエト曲
- ステンカラージン
- ヴオルガ下り
- トロイカ
- 仕事の歌
- 赤いサラファン
- ぐみの木
- バイカル湖のほとり
- 草原に
- 黒き雲
- カリンカ
- バルカンの星の下に
- カチューシャ
- 美わし春の花よ
- 誰が知ろうか
- 小麦色の娘
- 道
- 泉のほとり
- 航路
- 船のり
- おおカリーナの花が咲く
- リンゴの花咲く頃
- 灯
- 郵便馬車の駅者
- ジグーリ
- エルベ河
- 小川の向う岸
- 収穫の歌
- 祖国の歌
- 五月のモスクワ
- 行商人の歌
- 平和の歌
- 俺は鍛冶や
- お家の前で
- 夜の鷲
- 黒い瞳の
- リラの花
- 春の行進曲
- 樫の樹
- 夕べの集い
- モスクワ行進曲
- 呼応計画の歌
- シベリア大地の歌
- コムソモールの歌
- 我等平和のために
- 国の隅々から
- 村人の合唱
- ヴォルガの歌
- 今日はモスクワ
- 美わしモスクワ
- 鐘が鳴れば
- 野こえ山こえ
- すみれの瞳
- 森のかえで
- スメハ